

めたるも、本邦に於て多數に二種が産するに係らず余は其中間形とも見做すべきものを見たる事なく、本種は一般に前種よりも橙黄色翅多く、且前翅基部より第二の線は *pulex* に於ける如く直ちに内方に斜走せずして、一旦は外方に向ひ、亞前縁脈より内方に向ふ事と、本種に於ける中室外の線は Y 字状を呈し、*pulex* にありては「 $\sim$ 」字状を呈す。然も *pulex* に於ける角度は本種の有する線に相當する角度に對して遙に鈍きを見るべし。依て余は他に有力なる研究の出でざる以上二種を別種となすを適當なりと信す。

モンクロベニコケガ屬

*Stigmatophora* Staudinger.

口吻はよく發達し、唇鬚は水平に出で僅に額片を越え、雄の觸角は氈毛を有す。脛節には長き距を存す。前翅第二脈は中室の中央より斜出し、第三脈は下角前より發し、第五脈は下角上より發し、第六、七、八、九脈は基部を共にす。第十、十一脈は中室より出づ。後翅第二脈は中室の中央より出で、第三脈は下角に近く出で、第四、五脈は基部を共にす。第八脈は中室の中央より出づ。(ハムブソン氏) 美麗なる種にして、紅色の種と黄色の種あり。多少ベニコケガ屬に似たり。

A 翅は黄色なり。

ゴマダラキコケガ *Hana*.

臺灣産白蟻に就て(大島)

B 翅は赤色を帯ぶ。

a 前翅中央後に於て各翅脈間に條あり。

モンクロベニコケガ *Photophila*.

b 前翅中央後に於て各翅脈間に黒條なし。

ベニコケガ *trivittis*.

### ●臺灣産白蟻に就て

理學士 大嶋 正 滿

(明治四十三年五月二日受領)

明治四十一年十二月本誌第二百四十二號を借りて内地産白蟻二種を記載せる右白蟻に關して素木農學士の有益なる研究あり。「本邦産白蟻に就て」と題し日本昆蟲學會々報第二卷第十號に在來既知のもの三種並びに五新種を發表せられたるが之により白蟻驅除法研究に従事しつつある吾人の如きは一道の光明を認めたるの感なき能はず。

爾來本邦産白蟻に就ては同氏の結果に従ひさきに臺灣總督府より發行せる第一回白蟻調査報告書に於ても概ね其命名法を襲用せしも其名予の採集し得たる幾多の材料に就て重ねて研究を試みたる結果氏の記載せる臺灣産新種の二三に就ては疑團百出殆ど歸着する所を知らず。もど之れ雲煙過雁視すべき小問題なれども白蟻の害に就て

多少世の注意を惹起せる今日其學名を確定し置くの必要に迫れるを以て不敏を顧みず此の稿を草し以て素木農學士並びに昆蟲専門學者の示教を乞はんとす。

予と素木學士と共に職を臺灣總督府に奉ずるもの私交上に就ては何等の隔意なし。當初此の研究に關しては互に其標本參考書を交換し、共同研究として歩調を同ふし來りしも今や互に見る處を異にし到底同一の軌道を蹈む事能はざるを以て茲に予が研究の結果を發表し以て氏の示教を乞ふと爾云ふ。

予の研究に従へば臺灣産白蟻は次の五種あり。

*Leucoterms Navipes* Kollar.

*Coptoterms Gestroi* Wasmann.

*Terms vulgaris* Haviland.

*Terms longicornis* Wasmann.

*Caloterms Kōshunensis* Shiraki.

以下之に就て記載を試むべし。

Genus *Caloterms* Teron.

1 *Caloterms Kōshunensis* Shiraki.

和名ロウシュンシロアリ

1909, *Caloterms Kōshunensis* Shiraki, Trans. Inst.

Inol. Soc. Japan. Vol. II Part 10 p. 8, (日本

昆蟲學會々報)

1909, *Caloterms Kōshunensis* Oshima. 第一回白蟻

臺灣昆蟲誌 P. 210.

成蟲

體は赤褐色を呈し觸角及び脚節は淡褐色なり。頭部は圓く幅廣き前額を有し上唇比較的大にして半ば大顎を覆ふ。複眼大にして突出し其内側に密接して不明瞭なる單眼を備ふ。觸角は不完全にして其關節數を知る事能はざりしも基節は圓筒狀を呈し其長さは第二第三兩節を合せたるものに相等し。第二節は第三節より長し。前胸は頭部と相等しき幅を有し前縁直線を書き後縁半圓狀を呈す。透明にして稍光澤ある翅を備へ前翅の前縁少しく褐色を帶ぶ、主なる翅脈は赤褐色を呈せるが前縁脈及び副前縁脈は殆ど相平行して走り後者は前者に向つて五枝を分出す。第二脈最も長く翅の中央に達して前縁脈と結合す、中脈は翅幅の三分の一に相當する部分を走り多數の橋によりて副前縁脈と連絡するのみにして枝脈を有せず之に反して副中脈は翅の中央を走り後縁に向つて十二脈を分出す。但し其各は極めて不明瞭にして僅かに其痕跡を認め得るに過ぎず。後翅に於ては前縁脈及び副前縁脈は其基部に於て合一し前者は僅かに一枝を分出す。前翅痕は後翅痕より非常に大なるのみならず副中脈の發點より其後縁に向ひ白色の一線を有す。後肢は腹部の尖端を超ゆ。

前翅を開張せる長さ

二五、ニ、メ

頭端より翅の尖端に至る長さ 一四・三・メ  
 體長 七・三・メ

產地

舊恒春廳管下高士佛、林圯埔。

(*Tennes Tennes Timm*)

Subgen. *Leucotermes Silvestri*.

2. *Leucotermes flavipes* Kollar.

和名キアシシロアリ

1837. *Tennes flavipes* Kollar. *Naturg. Schädli.* 1 Ins. p. 411.

1839. *Tennes flavipes* Burmeister *Handb. 1 Ent. Vol. 2, p. 768.*

1858. *Tennes flavipes* Hagen. *Finn. Ent. Vol. 12, p. 182.*

1861. " " *Neuroptera of North America* p. 3.

1879. *Tennes flavipes* Thschubenberg. *Insektenkunde. Vol. 4, p. 198.*

1902. *Tennes flavipes* subsp. 1 *paracensis* Wasmann *Zool. Jahrb. System. Vol. 17, p. 119.*

1908. *Tennes flavipes* Oshima. *動物學雜誌第二十卷第二十四十二號, 五百一十五頁*

1909. *Leucotermes flavipes* Shiraki. *Trans. Entomol. Soc. Japan. Vol. II, part 10, p. 230.*

臺灣産白蟻に就て(大島)

(日本昆蟲學會々報)

1909. *Leucotermes flavipes* Oshima 第一回白蟻調查報告, 頁, 30.

此の種は嘗て内地産白蟻なる標題の下に本誌に記載せるを以て記事の重複を避くる事となしたるも其の分布並びに他の内地産の一種なる *Leucotermes speratus* Kollar の區別に就て一言論及せざるを得ず、素木氏は此の白蟻は内地に産するものにして臺灣には未だ之を見ずと記されたるも予の研究に従へば此の種は東京附近より臺灣北部に亘りて分布するものと如し。即ち予が在學當時東京小石川植物園事務所床板より採集せるもの之にして松村博士指導の下に研究せる結果は此の種は全く *T. flavipes* の記載と符合するものにして東北農科大學昆蟲學教室に所藏せる標本は(産地、氣仙沼及札幌)次の如き諸點の相違を有し既に日本産白蟻として知られたる *T. speratus* と同一種なる事を知るを得たり。

*speratus*

*flavipes*

前翅に於ける前縁脈及び副前縁脈は密接して走向し中脈と副前縁脈との距離は前者と副中脈との距離の二倍に等し

前翅に於ける前縁脈は他品に比して稍大なる間隔を有し中脈は副前脈及び副中脈の中間を走る

亞成蟲

二一

## 兵 蟻

前胸小にして後縁著しく狭  
小なり

前胸は前者に比して稍々大  
後縁又狭からず

元と此の二者は極めて類似せるものにして素木氏も論述せられたるが如く、日本固有の種類は或は他の地方的變種なるやも計り知るべからず。然れども右の如く予の目撃せる標本に於ては明なる相違あるを以て暫く之を別種と見なし、次に臺灣臺北に於て予が屢採集せる種類に就て觀察を下さんに此の種は東京産白蟻と何等の相違を有せず以上の諸點悉く *T. Navipes* に一致するを以て此の種が臺灣に産すること明瞭なれども素木氏が臺灣の北部迄分布すと記されし *T. speratus* は果して臺灣に産するや否や頗る疑問に屬す。予も嘗て同一の誤見を有し本誌に於て *T. speratus* は臺灣に分布するが如く記せしも詳細に研究せる結果當初予の見て以て *T. speratus* と思考せる者は全く *T. Navipes* なる事を知るを得たり。同氏亦同一の誤りを反覆せるに非ずや記して以て高教を待つ(未完)

## 内外彙報

## 進化論遺傳及趨異學

## ●進化論者の一空想

丘博士、本年一月の中央公論に、『人類の將來』を論せられしが、次で慶應義塾に

於て『人類の不進歩』を講演せられ、其の筆記は同塾學報二月號に掲げられたり。博士の論せられし所は、現代文明に對する忌憚なき、しかも眞摯なる批評と警告となりしも、其の立論の基礎は、生物學、進化論の事實に置かれたり。されば、世の道德家宗教家の之れに對し如何なる反響を與ふべきかは、吾人の聞かんと欲する所なりしが、既に山路愛山、白松南山其他の諸氏の評論の表はれたるを見る。而して中嶋徳藏氏の一稿、論じて最も詳細に涉れり。次に抄録する所のもの即ち是れ也。但し茲には評論を紹介するに止まる。故に先づ丘博士の原文を熟讀せられん事希望に堪へず。誤解を醸さんを恐るればなり。

中央公論一月號に、丘博士は、人類の絶滅すべき事、今既に絶滅の下り坂に傾き居るを言へるを聞き、早速一讀せるに、其の豫言は一種の空想に過ぎず。され共、其の基礎が進化論にして、主張者が立派なる學者なるを以て、世人の或は之れに對して信仰を起さん恐れて、一言辯じ置かんとする次第也。

先づ斯かる豫言の及ぼす結果より考えんに、吾人々類一切が跡形もなくなり、歴史的生活も煙の如く消え失すべきが最終の事實なりとすれば、第一、人生の無意義を思ひ浮ばしめ、一種の厭世觀を懐かしめざるを得ず。其の結果は自暴自棄となり、唯だ現時的の快樂、特に瞬間